

市民参加イベント

『これからの震災メモリアルを語る  
～東日本大震災の経験を未来につなぐ拠点とは～』

報 告 書

令和元年 9 月 1 日

## ●開催概要

- 日 時** 令和元年8月3日(土) 13:00~16:30
- 会 場** せんだいメディアテーク 1F オープンスクエア
- 目 的** 中心部震災メモリアル拠点の基本構想策定に向けて、現在の検討状況を周知するとともに、幅広く意見を募り、今後の議論を深めていくため。
- 内 容**
1. あいさつ  
東北大学 名誉教授  
中心部震災メモリアル拠点検討委員会 委員長 野家 啓一
  2. 中心部震災メモリアル拠点の検討状況について  
東北大学大学院工学研究科 准教授  
中心部震災メモリアル拠点検討委員会 副委員長 本江 正茂
  3. 講演「カストロフの記憶とメモリアル」  
大学共同利用機関法人人間文化研究機構 総合地球環境学研究所  
客員准教授 寺田 匡宏
  4. ワークショップ

### 参加者（敬称略。以下同様）

一般参加者 71 名（ワークショップ参加 56 名、講演のみ聴講 15 名）

#### 中心部震災メモリアル拠点検討委員会委員 7 名

- 植田 今日子（上智大学総合人間科学部 教授）  
遠藤 智栄（地域デザイン・ラボ代表） ※総合ファシリテーター  
大泉 大介（株式会社河北新報社 防災・教育室部次長 兼 営業局営業部部次長  
兼 営業局業務推進部部次長）  
佐藤 翔輔（東北大学災害科学国際研究所 准教授）  
佐藤 泰（せんだいメディアテーク 副館長）  
野家 啓一（東北大学 名誉教授）  
本江 正茂（東北大学大学院工学研究科 准教授）

#### テーブルファシリテーター8 名

- 赤川 泉美（NPO 法人 地星社）  
安藤 歩美（TOHOKU360 編集長）  
北野 央（公益財団法人仙台市市民文化事業団）  
豊嶋 純一（NPO 法人 都市デザインワークス）  
中沢 峻（宮城大学基盤教育群特任講師／一般社団法人みやぎ連携復興センター）  
中津 涼子（NPO 法人 せんだい・みやぎ NPO センター（多賀城市市民活動サポートセンター））  
松村 翔子（NPO 法人 せんだい・みやぎ NPO センター（仙台市市民活動サポートセンター））  
吉田 祐也（学校法人 尚綱学院）



### 「カタストロフの記憶とメモリアル」

大学共同利用機関法人人間文化研究機構 総合地球環境学研究所  
客員准教授 寺田 匡宏

#### 1. はじめに

- 私は、46億年の地球環境と人間の関係をどう捉えるかについて研究している。特に、阪神淡路大震災について研究を続けており、発生から20年近く経つ中で記憶が伝わっているか、繋いでいけるか注視している。今回は話をわかりやすくするために、あえて、神戸の事例に絞って講演を行いたい。

#### 2. メモリアル

- 「メモリアル」とは名詞でいうと、①過去の重要な出来事や故人を思い出させるための像や石 ②人々に何かを思い出させるための何か。とされているが、これらは必ずしもモノには限らない。教会で行われるメモリアル・サービスという儀式などが、その一例だ。

#### 3. 記憶

- 記憶には、公定記憶 (official/governmental/municipal/national)、公共的記憶 (public)、社会的記憶 (societal)、コミュニティ記憶 (communal)、家族的記憶 (familial)、二人称的記憶 (dual)、個的記憶 (individual/personal) などがある。
- これほどレイヤーがある中で、1つのメモリアルをつくる難しさがある。
- 公的(公定)記憶と社会的記憶の間には齟齬がある。このことに気を配りながらメモリアルについて考えていくべきだ。

#### 4. 阪神・淡路大震災の「公的(公定)」記憶

##### 4.1 経緯

- 神戸では、阪神淡路大震災のメモリアル施設「人と防災未来センター」が2002年に開館。年間50万人ほどの入館者を誇り、防災施設としては成功しているといえる。

## 4.2 乖離

- ・しかし、「人と防災未来センター」にも問題がある。それは市民と遠い施設になっていること。それは何故か、どのような乖離が起きているか話したい。
- ・市民と乖離してしまったことには、いくつか要因がある。1999年度国家予算（補正予算、建設省（現：国土交通省））として60億円計上され、国家の管轄する公定記憶を表現する場になったこと。そして、市民参加や被災者の意見を聞かずに建設されたこと。地元ではなく中央の展示会社の関与が強かったことなど。

## 4.3 「公定記憶」と捏造

- ・展示は、当時マスメディアが盛んに報道していた「火災」になぞるように仕立てられた。グラフ誌なども火災をフィーチャーし、それが公定記憶とされた。
- ・展示は大きく以下の3つのコンテンツからなる。①『1.17 シアター』、②ジオラマ、③映画『この街に生きる』。いずれも「ありそうだけれども、なかったこと」。
- ・映画は『ゴジラ』の監督として有名な川北紘一氏が被災者の話をモチーフに、火事で姉が生きながら焼死するのを目撃した妹が立ち上がるストーリーを作成（捏造）した。よく似た状況でなくなられた方は複数おられたが、これは、実話ではない。戦争を伝える際に、未婚の若い女性が被害者の象徴として描かれることは多い。これらは「無名の死者の捏造」といえる。
- ・一方、施設の3Fには実際の写真や遺品が展示されている。しかし、目立たない形で展示されている。上記の捏造された死者に比べて、実際の個別の死者は見えてこない、出てこない形だ。これらについては公定記憶として捏造された死者を際立たせるためには必要かも知れないが、現実の死者と捏造された死者の関係は、慎重に検討されるべきであろう。

## 5. 人々の記憶と時間の問題

- ・次に社会的記憶といえる人々の記憶と時間の問題について考えていきたい。

### 5.1 「震災モニュメント」とモニュメントマップ

- ・モニュメントマップは神戸の特徴的なもの。マップに震災のことを集約していこうという動きは、3.11でも見られる。

### 5.2 実存への問いとしてのカタストロフ

- ・どういったものがモチーフであるか調査を元に集計した。「犠牲者として」「抽象的なものとして」「特定のメッセージとして残す」など、さまざまなモチーフがある。その中で「あの出来事は何だったのか」という問いも生まれる。これらは公定記憶とは別の位相にあるもの。

### 5.3 石として、樹として—超長期の時間と人間の時間

- ・メディア（表現媒体）に何を使うかという問題もある。集計結果として、「石」「樹」「地蔵」などが目立った。たとえば、石碑の設置や植樹などが行われた事例は多い。石や樹は、人間の生命の時間を超えたはるかに長い時間、存在する。これらを使うことで「時間への問い」という視点も生まれる。この視点こそが「地球環境と人間の関係」の位相に重なるものだ。
- ・これらはただの物体に過ぎないが、儀式を重ねることで聖なるものになる。時間を重ねていくことで、記憶が少しずつ未来へ繋がっていく。

## 6. 複数のレイヤーとしての記憶

- 公定記憶と社会的記憶のレイヤーをまとめる。

公定記憶：1 点に記憶を集約しようとするもの。

社会的記憶：記憶は分散しつつ、長期的かつ自然に時間をかけて重なっていくもの。

- 東日本大震災のメモリアル、記憶について考える上で、以上の神戸の事例が参考になれば幸いである。

### 質疑応答（参加者からの質問に寺田氏が回答）

Q：公的記憶と社会的記憶の差異を教えて欲しい。

A：公的記憶と社会的記憶は重なる部分も大きい。強調したいのは、公的記憶のうちの、公共的記憶が、オープンな議論をもとにした記憶であること。公共は、英語ではパブリック public、ドイツ語では、オッフエントリッヒ oeffentlich だが、それは、オープンという意味だ。まさに、今回のような場は公共的記憶のための場だ。

Q：なぜ捏造は生まれるのか。

A：ある特定の社会状況の中で、物事を伝える際に構造として生まれるものだと考えている。戦争や災害の悲惨さを伝えるための捏造について、葛藤はあるものの、アジア太平洋戦争で戦争画を書いた画家の藤田嗣治氏が「事実でないものを書いてもいい」と語っており、先述の川北氏も「防災のために、実際にはないことをよりリアルに見せるために自分の技術を使う」と述べていた。

## ●ワークショップ.....

- 目 的** 参加者が「中心部震災メモリアル拠点」のあり方を対話し、多様な視点を提案。  
その内容は、委員会での議論に活かしていく。
- 班 数** 8テーブル（1テーブルあたり10名程度）
- 構 成** 前半と後半でテーマ及びグループを分けて討議
- 全体進行** 地域社会デザイン・ラボ代表  
中心部震災メモリアル拠点検討委員会 委員 遠藤 智栄



### [前半]

- 各班で「自己紹介」を行った後、以下の2つの問いについて討議。
  - ① 中心部震災メモリアル拠点は、何をする場か。そこで大切にしたいことは何か？
  - ② 中心部震災メモリアル拠点は誰のための場か？
- その中から関心度が高かったキーワードを2、3点選出し、各班のテーブルファシリテーターが代表して発表。

### [後半に向けて]

- 総合ファシリテーター、各テーブルファシリテーターを中心に各班から出されたキーワードを分類し、後半のテーマを設定。

### [後半]

- 参加者は自分が話したいテーマのテーブルに移動。
- 各班で「自己紹介」を行った後、以下の2つの問いについて討議。
  - ① キーワードを実現するにはどのようなことが必要か？何をどのように行う必要があるか？（例：なぜ、だれ、何を、どのように）
  - ② その拠点ができたら、どのように使われてほしいか？
- 最後に、各班のアイデアや意見をテーブルファシリテーターが代表して発表。

## ワークショップ [前半] 1班 テーブルファシリテーター 中津 涼子

- ①中心部震災メモリアル拠点は、何をやる場か。そこで大切にしたいことは何か？
- ②中心部震災メモリアル拠点は誰のための場か？



### ・キーワードとして発表されたのは、以下の3点。

- ① きちんと記録がなされ、被災された方が思いを語れる場所。一回語って終わりではなく、時間が経っても語り直しができる場所。
- ② カフェスペースや物産市などのイベントがあった方が、気軽に市民や出張中の人、観光客が訪れるきっかけになり、愛される施設になるのではないかな。
- ③ 東北、世界に発信する拠点として、言語を超える伝え方も大事。

### ・グループ内で出た主な意見は次のとおり。

**伝える場** 「震災当時の写真や被災者の話が聞けるだけでなく、震災のリアリティーを持たせる意味で、亡くなった方の名前入りの石碑を設置」、「被災された方の生の声を届けるのは前提として、情報操作されていない話」

**語る・語り直す** 「思いを語る」、「記憶を複数化しながら保存する場」、「語り直しができる」、「国内外からの支援があることで今があること。国名、地域、名前を記録する」、「来場する人たちの声を集めて、随時進化させる施設」

**立ち寄れる仕掛け** 「現在：追悼の拠点、過去：記憶の伝承、未来：防災教育というように、持続可能性、未来へのメッセージが大切」、「一般の人が参加できるイベントを開催する場所」、「祭りなどもできればよい」、「おいしいカフェがある」、「被災地の物産販売・産直市・震災グッズ販売」

**範囲** 「仙台市内だけでなく広範囲をまとめる拠点・つなぐ拠点」、「世界のへのメッセージを発信する」、「他県の支援団体の協力を得て東北全体を範囲に」、「言語を超える伝え方は大切（対象者：外国人・未来の方など 手法：映像・アートなど）」

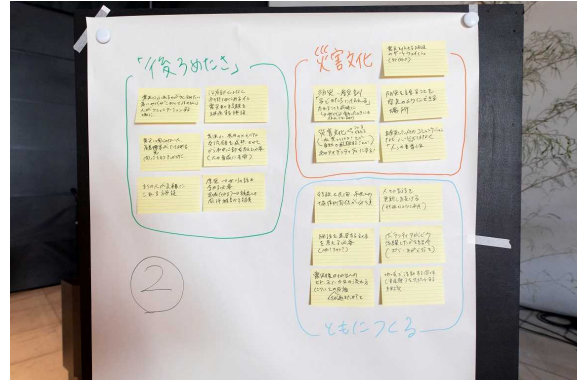
**対象者** 「市民のため」、「県外から来た人も案内できる」、「旅行者、出張者も」

**学ぶ場・防災** 「防災を学び、体験する場」、「防災、震災の学びの場、子どもたちの学びの場」

**その他** 「半年に一度訪れる場」

## ワークショップ [前半] 2班 テーブルファシリテーター 安藤 歩美

- ① 中心部震災メモリアル拠点は、何をやる場か。そこで大切にしたいことは何か？
- ② 中心部震災メモリアル拠点は誰のための場か？



### ・キーワードとして発表されたのは、以下の3点。

- ① **後ろめたさ** 市中心部につくる意味とは。沿岸部に比べて震災を語れない雰囲気がある。それをオープンに語り、コミュニケーションを作れる場に。外部の人が気軽に語れる場に。
- ② **災害文化** 災害文化をつくる拠点として水を蓄えるだけではなく、震災に対応できる仕組みをつくる。それを市のアイデンティティにする。
- ③ **ともにつくる** 行政主導ではなく市民、NPO など、みんなで作っていく。ポジティブなこともネガティブなことも伝えていく。

### ・グループ内で出た主な意見は次のとおり。

**後ろめたさ** 「震災にふれるのが後ろめたい若い世代や怖くて話せない人がコミュニケーションする場に」、「沿岸部ではなく、市街地にある意味。震災の経験を継承する施設」、「震災に関心のない人。観光客が立ち寄れる。関心を持つきっかけに」、「荒浜小、荒井のメモリアル交流館を成熟させてから市中心部を考える必要（人の育成に苦勞）」、「まちの人が気軽に訪れられる施設」、「原発→女川の話も含める必要、宮城（仙台）→福島への風評被害の経験」

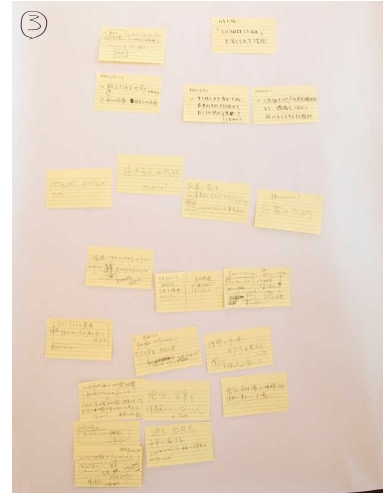
**災害文化** 「震災を伝える施設のゲートウェイに（外向け）」、「防災・教訓を子どもたちに伝える」、「防災を語ることを空気のようにできる場所」、「市のアイデンティティにする」、「被災した人とのコミュニケーションなど、ハードだけではなく“人”の重要性」

**ともにつくる** 「行政と民間、市民との協同関係が必須」、「人々の証言を更新し続ける」、「施設を運営する主体を考える必要」、「ボランティアがどう活躍したかを紹介」、「震災後の仙台へのヒト・モノ・カネの流れ方についての反省」、「地域で活動する団体をサポートする組織」



## ワークショップ [前半] 3班 テーブルファシリテーター 北野 央

- ① 中心部震災メモリアル拠点は、何をやる場か。そこで大切にしたいことは何か？
- ② 中心部震災メモリアル拠点は誰のための場か？



### ・キーワードとして発表されたのは、以下の3点。

- ① 被災地が広範囲なので、岩手などにも手を広げなくてはならない。
- ② インフォメーションセンターとして発信。東北を俯瞰するようなものと表に出にくい個人の声を両立できる施設。
- ③ 守れなかった命などの反省。公的な場所では出なかった意見を東北や日本に伝えていく。

### ・グループ内で出た主な意見は次のとおり。

**震災の全体像と個々の経験の両立** 「震災の全体像が理解できる情報が集まっている場」、「仙台は窓口としてのインフォメーション機能」、「東北のさまざまな被災地の現場に手を伸ばせるような、目を向けられるような視点を持つインフォメーション機能」、「東北の全体像とパーソナルなこと」、「沿岸被災地・帰還困難地域など現場とつながり続けようとする仕組み」

**伝えたいこと** 「救えたはずの命を伝える。私の反省、あなたの反省」、「復興の手順、あり方を見せるべき」、「仙台市内の地震被害に目を向けなくてもよいのか」、「仙台の経験を広く捉えた方がよい」、「マイノリティの意見を発信できるとよい」

**これからの社会・生きる力を創造する** 「3.11 を経験した日本を創り出す場所」、「生き抜く力を育むために最善の手法や仕組みを柔軟に取り入れ続ける」

**大切にしたいこと** 「表面上の知識だけではなく、人の声、個々の声」

**誰のため** 「次世代、子どものため」、「過去を出発点として、未来に届ける。過去と未来の両方の視点が必要」、「震災、災害を体験していない人のため」、「生きる人のため」、「死者のため」、「死者に花を。沿岸部の方が相応しいのではないか」

## ワークショップ [前半] 4班 テーブルファシリテーター 赤川 泉美

- ① 中心部震災メモリアル拠点は、何をやる場か。そこで大切にしたいことは何か？
- ② 中心部震災メモリアル拠点は誰のための場か？



・ キーワードとして発表されたのは、以下の2点。

- ① **集まりやすい場所** 子どもたちが遊びのついでに訪れられる場所。被災者が集まって語れるような場所。
- ② **記憶を伝えていく** 上手く伝えるために抽象化しつつ、どんな動きがあったか人間のたくましさ、強さを未来へ伝え、自ら学んでいるうちに他人事が自分事になるような見せ方。

・ グループ内で出た主な意見は次のとおり。

**集まりやすい場所** 「日常的に集まる気になれる場」、「身近なものだと捉える」、「未来のために被災した人たちが集まりたくなる。犠牲者とその家族のために死を無駄にしない」

**記憶を伝える** 「何があったかを伝える。無念さ・悲しさ・混乱と学び・感謝・備え」、「これまでにない災害だったので震災を大切に心の中に留めるように形づくる」、「他者の痛み（苦痛）へのまなざし／想起」、「被災者一人ひとり異なる体験の多様性を知ることができる場」、「記憶を残す」、「大きな物語ではない個人の小さいが大事な物語を残していく場」、「個人の記憶を社会的記憶にする」

**被災各地とのつながり** 「沿岸部のメモリアル拠点への情報発信」、「沿岸被災地との連携」、「被災地全域のフローをつくる」

**学びの場** 「防災教育」、「知識と知恵を得る場」、「自ら学ぶ場」

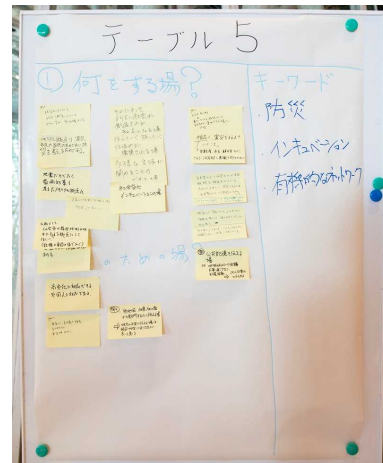
**活動支援** 「小さな活動、草の根的な活動を支える場」、「震災から8年経っても今なお続いている活動を支援」

**誰のため** 「宮城県民のために必要」、「震災の犠牲者やその遺族のためでもあるし、50年後、100年後、200年後を見据えたこれからの人たちのためでもある」

**その他** 「文化／経済といった行政の縦割りを超えた施設にすべき」

## ワークショップ [前半] 5班 テーブルファシリテーター 吉田 祐也

- ①中心部震災メモリアル拠点は、何をやる場か。そこで大切にしたいことは何か？
- ②中心部震災メモリアル拠点は誰のための場か？



### ・キーワードとして発表されたのは、以下の3点。

- ① **防災** 地震や津波被害以外だけでなく、豪雨対策など、「平時の防災」を主導するような場にする。一方で人と防災未来センターと同じような「防災」の機能を持った施設ではない方が良いという意見も出た。
- ② **インキュベーション** 伝えていく、残していくための仕組みを構築する場。展示をつくったら終わりではなく、アップデートして市民に伝え続けていく場。
- ③ **有機的なネットワーク** 東北の玄関口として、外から来る人や震災のことを知らない人達を、沿岸部に繋ぐ。個人的な体験を怖さではなく、共感で伝えていく。

### ・グループ内で出た主な意見は次のとおり。

**防災を考える場・指令的立場** 「防災センターとして防災・減災について伝え、学び、考える場として」、「メモリアル拠点は県民、市民や国民のためであり、防災を考えるためである」、「地震だけでなく豪雨対策も考えたメモリアルの拠点に」、「公助として仙台市の指令的立場になりうる拠点にしてほしい（記録の集約の場でなく）」

**防災ではない拠点** 「兵庫の“人と防災未来センター”と役割分担し、防災ではない拠点に」

**記憶を伝える** 「未来に記憶を残す。子どもたちに、未災地の人に」、「公共記憶を伝える場として、次の災害のヒントとする」

**これからの社会・仕組みを創造する** 「よりよい社会が創造される拠点となる場」、「伝えていく・残していく仕組みが構築される場」、「多様な主体が関わることのできる場」、「社会変化、インキュベーションの場」

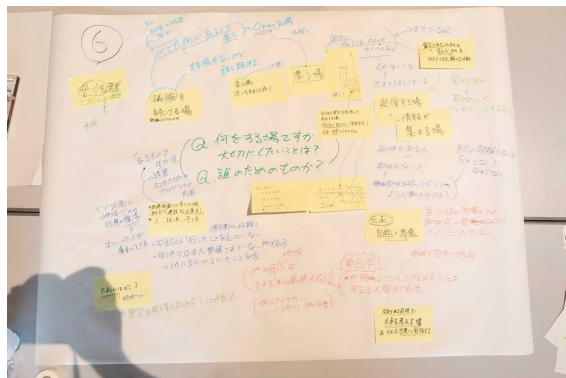
**震災の全体像** 「東北エリアの拠点として総合的に集約できる場に」、「幅広く震災を伝えていくこと」

**誰のため** 「高齢化に対応できる、外国人に対応できる」、「他地域、他県、他の国から訪問する人に伝える場であり、地元の子どもの伝える場は被災地区にあった方がいいと思う」

**当事者性** 「当事者をどう設定するかが重要。純粋な被災者だけでは広がりがない。共感が生まれない。当事者としての一体感が生まれ辛い」、「被災にも“自分らしさ”は出るか。復興する姿にこそ“自分たちらしさ”が出ると思う」

## ワークショップ [前半] 6班 テーブルファシリテーター 中沢 峻

- ①中心部震災メモリアル拠点は、何をやる場か。そこで大切にしたいことは何か？
- ②中心部震災メモリアル拠点は誰のための場か？



### ・キーワードとして発表されたのは、以下の3点。

- ① 継続して議論していける場。すぐに答えがでるものだけではない。
- ② 震災を経験として学んだこと、さまざまな知見を伝える場。時間軸（未来へ）と空間軸（日本全体や世界へ）の2軸の広がりを意識する。
- ③ 震災遺構、メモリアル交流館といった、すでにあるものとの連携やネットワークを生かす。

### ・グループ内で出た主な意見は次のとおり。

**集う場・語り合う場・議論の場** 「議論を続ける場」、「集う場（思いを共有する場）」、「語り継ぐ場」、「思い出す場・知る場・学ぶ場」、「地域ごとの行事の復活など、出ていった人が集まってくる仕組み」

**震災の全体像** 「東日本大震災を総括して発信する場。日本、世界の人々のため」、「情報が集まる場・発信する場」

**伝えたいこと** 「震災で失ったものと学んだものを永久に伝え続ける活動」、「伝承は記録と想像の掛け算が必要。震災後の風景からは震災前の営みがイメージできない」、「魂はどこか。震災を契機に向き合うことがあった」

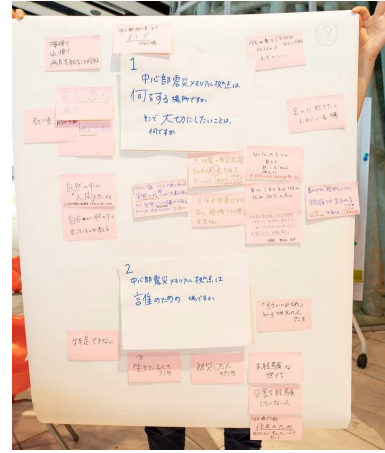
**未来へ・世界へつなぐ** 「災害がある前提で未来を考える場であり、それを世界に発信する」、「世界レベルで“伝える”ことを考える必要がある。他の国・地域はそれぞれの環境や文化を有するが、それらにも配慮した発信方法の検討が必要」

**既存施設との連携** 「既存施設への導入の場。新たに建設する必要なし。現地では未だに整備されていない所もあり、他にまだやるべきことある」、「あるものを活かし、誘客、子ども向けプログラムの充実」

**学びの場** 「女性や若者らがリーダーシップを育む機会・教育プログラムの提供」

## ワークショップ [前半] 7班 テーブルファシリテーター 松村 翔子

- ① 中心部震災メモリアル拠点は、何をやる場か。そこで大切にしたいことは何か？
- ② 中心部震災メモリアル拠点は誰のための場か？



### ・ キーワードとして発表されたのは、以下の3点。

- ① 仙台市は被災地の中でも、津波被害があった唯一の政令指定都市。そこを訪れたときに美しい海を思い出せる場。
- ② 自然、歴史の中で、自分が今どういった位置にいるのか実感できる場。頭で学ぶよりも実感できる場。
- ③ 実感を通じ、ストーリーに落とし込み、自分事化することで、自らアクションを起こさせる場。個人的な意見を集めながら、ハブとして発信できるかが大事。

### ・ グループ内で出た主な意見は次のとおり。

**被災各地とのつながり** 「ハブ・つなぐ場」、「東北の伝承施設の窓口」、「海側・山側の両方を知ることができる」、「福島の問題（放射線、原発）を伝えるのは難しい」

**震災を感じられる場** 「震災を思い出す場所」、「実感できる場、実感し続けることが大切」、「動かしがたい現物とともに物語が生まれること」

**人の行動につなげる** 「教訓 自分の行動につなげられる場（メモリアル拠点で得た誰かの体験を自分の今の生活に活かしてもらえる）」、「大地震の被災状況そのものよりも、それをキーにして、これからについて持ち帰ってもらえる」

**自然と人間の関係を考える場** 「自然の中の人間を思い出す」、「自分が何のもとに立っているのかを考える」

**追悼** 「亡くなった方への追悼。想いを知る」、「会いに行きたい人がいる場」

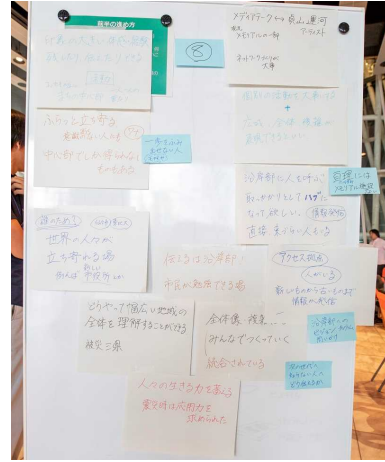
**立ち寄れる仕掛け** 「重すぎないこと。ある種の軽さ」

**感情やリアルさ** 「文字や写真だけではなく、感情（人の想い）を大切に」、「死者から学ぶ場、リアルさ、体験性」

**誰のため** 「特定できない」、「今、生きている人のため」、「被災した人のため」、「“もういいから”という地元の人たち」、「未経験の世代」、「災害を経験していない人」、「住民のため」

## ワークショップ [前半] 8班 テーブルファシリテーター 豊嶋 純一

- ① 中心部震災メモリアル拠点は、何をやる場か。そこで大切にしたいことは何か？
- ② 中心部震災メモリアル拠点は誰のための場か？



・ キーワードとして発表されたのは、以下の3点。

- ① **ふらっと立ち寄れる場** 意識の高くない人でも普段の延長でふらっと来られるように。今モヤモヤしている人が一歩踏み出せるように。
- ② **学ぶ** 被災地の情報を知るだけでなく、能動的に勉強したり、人の生きる力を学べる、蓄えられる場に。
- ③ **ハブ** 沿岸部とつながるように。貞山運河とメディアテークの2拠点で展開するプロジェクトのように、中心部と沿岸部の連携が取れると動きやすい。

・ グループ内で出た主な意見は次のとおり。

**立ち寄れる仕掛け** 「ふらっと立ち寄る。意識の高くない人にも伝わる仕掛け」、「中心部でしか得られない体験もある」、「世界の人々が立ち寄れる場。例えば新しい市役所の中にあるとか」

**個別の活動の集積としての全体像** 「幅広い地域の全体を理解することができる」、「個別の活動を大事にしつつ、広域で全体のことも取り上げることで、複雑さが表現できるといい」、「全体像・複雑性はみんなで作っていく」

**被災各地と連動する** 「沿岸部に人を呼び取っ掛かりとしてハブになって欲しい。交通の便がなく直接来づらい人もいる。アクセス拠点」、「メディアテークと貞山運河の2拠点で展開する現代アートプロジェクトのような連動で、各沿岸部をつなぐ」

**経験を残し、伝える** 「印象の大きい体感・経験を残したり、伝えたりできる」

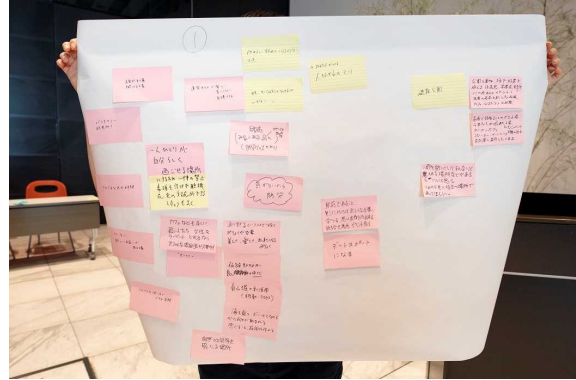
**学びの場** 「伝えるは沿岸部！市民が勉強できる場」、「新しいものから古いものまで自由に情報が得られる」

**人の生きる力** 「人々の生きる力を蓄える。震災時は応用力を求められた」

## ワークショップ [後半] 1班 テーブルファシリテーター 中津 涼子

### テーマ <誰でも気軽に集える場>

- ① テーマを実現するにはどのようなことが必要か？何をどのように行う必要があるか？  
(例：なぜ、だれ、何を、どのように)
- ② その拠点ができたら、どのように使われてほしいか？



#### ・以下のアイデア、意見を発表。

**Where どこで** 駅前だとさまざまな人が訪れることができる。自然を感じられる場。

**What 何を** 避難場所にも使える公園のような気軽なスペース。さまざまなことができる空間。防災につながる参加型イベントの展開も。

**How どのように** 仙台らしさや運営する人も大切。

#### ・グループ内で出た主な意見は次のとおり。

**Where どこで** 「駅前であること」、「貞山堀の活用」、「自然との共存を感じる場所」

**What 何を**

**【直接的な経験の継承の場】**「語れる場、聞ける場」、「訪れた人がそれぞれの3.11をつくる場所」、「死者の名前を刻した石坂」「そこ(仙台)でなければならぬもの、仙台だからこそ伝えられるものがある」

**【多目的な場・気が付けば経験の継承につながる場】**「気が付いたら防災につながる取組み」、「避難場所も兼ねた公園(花見、紅葉、芋煮会、野菜市、ノミの市などのイベントにも活用)」、「家族で訪ねることのできる場」、「子どもたちが遊べる場(モニュメントや体験を通じて継承)」、「デートスポットになる」、「行く度に新しい出会いがある場」、「さまざまな使い方ができる空間」、「行けば楽しくなり、学べ、思い出作りができ、待ち合わせにも使える場所」、「海を見てボーっとしながら心に何か感じられ、物語をつくれる場所」

**How どのように**

**【開かれた雰囲気】**「一人ひとりが自分らしく過ごせる場所にするために、一律の禁止事項を設けず臨機応変に対応できるスタッフを置く」、「いつでも開いていて、すんなりと入れる場所」、「リピーターができるように」、「県外の方に案内したくなる」、「立ち寄りだけの方からじっくり長時間過ごす方まで、さまざまな尺の時間に対応できる」

**【楽しさや魅力ある雰囲気】**「若い人たち、女性をターゲットとするならオシャレな雰囲気も必要」、「魅力が必要(美しさ・楽しさ・また来たくなる)」、「他の人にすすめたくなるような工夫」、「運営する人が楽しい、苦しくない、自慢できる」

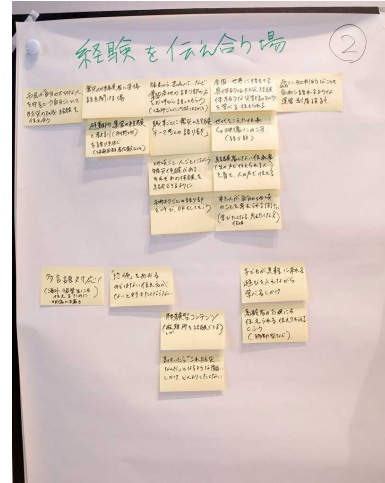
**【利用しやすい環境】**「バリアフリー対応や託児所機能も必要」

**【飲食・物販】**「魅力あるものの販売(地産品、防災グッズなど)」、「カフェ、レストランは必須」

## ワークショップ [後半] 2班 テーブルファシリテーター 安藤 歩美

### テーマ <経験を伝え合う場>

- ① テーマを実現するにはどのようなことが必要か？何をどのように行う必要があるか？  
(例：なぜ、だれ、何を、どのように)
- ② その拠点ができたら、どのように使われてほしいか？



・以下のアイデア、意見を発表。

#### What 何を

【**体験を語り継ぐ**】訪れた人が自分事として持ち帰られる場所。避難所での体験を語り継ぐ場。生の声を伝承できる語り部を育てる場。

【**楽しみながら学ぶ**】楽しく学べる体験型コンテンツ。子どもが遊びながら学べる場。高齢者でも理解できる場。

#### How どのように

【**被災の多様性を示す**】異なる被災地の状況の多様性、それぞれを定期的にピックアップして知識を得られるように。

【**当事者性を出す工夫**】世界でも役立つ防災拠点として、見た人が「自分の地域ではどうするか」考えられるように。

【**利用しやすい環境**】多言語対応

・グループ内で出た主な意見は次のとおり。

#### What 何を

【**防災の知識を伝える場**】「市民が自分事として“自分の大切な人を守る”という意識で防災の知識、経験を伝えあう」、「全国・世界に役立つ具体的な防災経験、体系的な災害後の知識を学べる、伝えられる」、「体験型コンテンツ（避難所を体験できるとか）」

【**語り部活動の場**】「震災の体験者に直接話を聞ける場」、「避難所運営の経験と教訓（市街地）を語り継ぐ（帰宅困難者問題なども）」、「東北各地の語り部をお呼びし語ってもらう（場所ごとに問題は違う）」、「職業ごとに震災の経験“テーマごとの語り部”」、「市町村ごとの語り部を呼び、地域ごと、人ごとに違う被災体験を紹介してもらう」、「世代を超えた伝承として語り部を映像に残す」、「経験者でない伝承者（生の声で伝えられる人）を育て、人の声で伝える」

【**気が付けば防災につながる仕掛け**】「気づいたら“これ防災なんだ”となるような面白い仕掛け、どんよりしたくない」

#### How どのように

【**当事者性を出す工夫**】「来た人が自分の地域のことを考えられる設計に（学びたくなる、考えたくなる、伝え方）」

【**自由に語れる運営**】「市や政府に批判的なことを自由に語れるような運営・制度設計」

【**気軽に行ける工夫**】「“恐怖”を煽るのではない伝え方がないと行きたくならない」、「子どもが気軽に訪れ、遊びながら学べる仕掛け」、「高齢者にも伝え、伝えられる工夫（移動型など）」

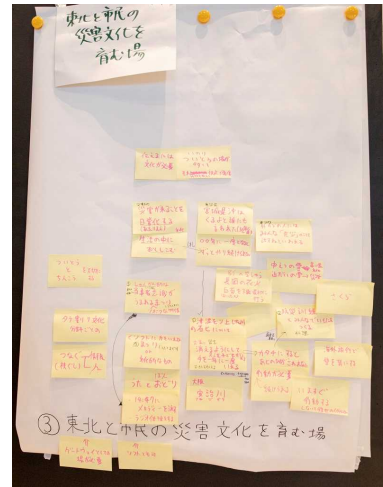
【**利用しやすい環境**】「多言語対応」



## ワークショップ [後半] 3班 テーブルファシリテーター 北野 央

### テーマ <東北と市民の災害文化を育む場>

- ① テーマを実現するにはどのようなことが必要か？何をどのように行う必要があるか？  
(例：なぜ、だれ、何を、どのように)
- ② その拠点ができたら、どのように使われてほしいか？



- ・災害文化とは災害があることが当たり前であると考え、日常化することであり、生活に落とし込むためにどうすべきかを話し合った。

#### What 何を

【形として残すもの】大阪の安治川の事例が参考に。津波が遡上したことを石碑にし、その石碑の文字をお盆に子ども達が習字でなぞる。

【続けられる行動】毎年石碑をなぞること、防災訓練として芋煮などの料理を作りながら行動すること、震災に対する当事者意識が生まれる祭り、震災発生時刻に特定のメロディを流すこと、歌・踊りをつくることなど、続けられる行動も必要。

【行動を支える】拠点として続ける行動を支える。

- ・グループ内で出た主な意見は次のとおり。

#### What 何を

【東北のゲートウェイ】「東北のゲートウェイとしての場が必要。市民とソフトの取組みをつなぐ場でも可」

【異なる分野をつなぐ】「タテ割に横串を入れて情報や人をつなぐ」

【続けられる行動】「大阪の安治川では、津波が遡上したことを石碑にし、その石碑の文字をお盆に子ども達が習字でなぞっており、続けられる行動が必要」、「防災訓練としてみんなで芋煮を作りながら行動するなど、いまずぐ行動しないと後世の人がやらない」、「瞬間的ではあるが、当事者意識が生まれる素朴な祭り（歌や踊り）」、「祭りなどの文化的なソフトに力をいれる」、「14時47分にメロディを流し、ラジオ体操をする」

【追悼・鎮魂】「追悼と鎮魂を大切にする」、「長岡花火は8月1日の空襲の日で開催されるが、最初に白菊を3発打っている」

#### How どのように

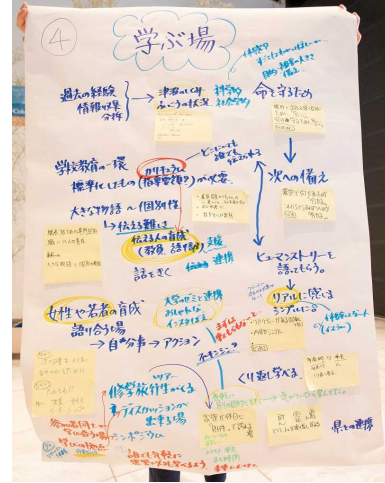
【災害を日常化することの難しさ】「災害文化とは災害がくることを日常化し、生活の中に落とし込むことだが、何十年に一度となるとずっとやり続けられない」

【地域で異なる対応】「中越の雪は高い家文化につながっているが、仙台の雪は災害につながる」

# ワークショップ [後半] 4班 テーブルファシリテーター 赤川 泉美

## テーマ <学ぶ場>

- ① テーマを実現するにはどのようなことが必要か？何をどのように行う必要があるか？  
(例：なぜ、だれ、何を、どのように)
- ② その拠点ができたら、どのように使われてほしいか？



・以下のアイデア、意見を発表。

### What 何を

【**学校教育**】未来を担う子どもは学校教育の中で学ぶべきであり、そのためには色々な人と連携しながら、語り部など伝える人の育成が必要。

【**震災以外も学べる場**】沿岸部はリアルに感じる場であり、中心部は気軽に震災以外のことや子どもが学べる場に。

### How どのように

【**気軽に立ち寄れる工夫**】おしゃれ、インスタ映え、おいしいもの、スポーツ施設の近くなど、気軽に立ち寄れる工夫でとにかく来てもらうことが大切。

・グループ内で出た主な意見は次のとおり。

【**Why なぜ**】「命を守るため、犠牲と混乱を繰り返さないために学ぶのであり、震災で何があったのか分かれば、これからどうすればいいか分かる」

### What 何を

【**アクションにつなげる仕組み**】「語り合う場を持つことで自分事化し、アクションにつなげる」、「ヒューマンストーリーをシンプルに語ってもらうことでリアルに感じ、自分事化できる。」

【**学校教育**】「学校教育の一環として標準化したカリキュラムが必要。大きな物語から個性がることまでを伝える難しさがあり、伝える人（教員、語り部）の育成が必要。」

【**学び合いの場**】「参加者同士が学び合う場所。修学旅行生やツアー客など誰でもディスカッションできる場。」

【**慰霊**】「慰霊の場として人々が繰り返し訪れる（県との連携）」

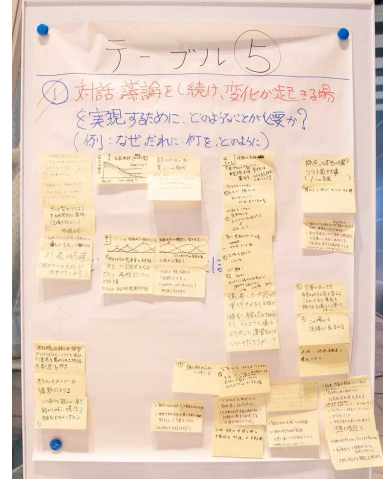
### How どのように

【**別目的でも気軽に行ける工夫**】「おしゃれな雰囲気やインスタ映え、大学ゼミの連携など、別目的で気軽に行き、気づいたら学んでいたという工夫も必要」、「家族が休日に“別件”で訪れる場所」、「誰でも気軽に震災以外も学べるように」

## ワークショップ [後半] 5班 テーブルファシリテーター 吉田 祐也

### テーマ <対話・議論をし続け、変化が起きる場>

- ① テーマを実現するにはどのようなことが必要か？何をどのように行う必要があるか？  
(例：なぜ、だれ、何を、どのように)
- ② その拠点ができたら、どのように使われてほしいか？



・以下のアイデア、意見を発表。

#### What 何を

【**根本的で重い問いのテーマ型セッション**】広島平和記念資料館には、原爆を落とした行為だけにとらわれず、その行為を行った「人とは何か」という問いを考えさせられる場になっている。そのような根本的で重い問いを考える場が中心部拠点でも必要ではないか。

【**気軽に対話できる場**】重いテーマの一方で、お茶っこサロンのような気軽な仕組みも必要。

#### How どのように

【**やる気のある人を集めプロジェクト型で進める**】持続可能な場とするためには、最初に行政のお金を一気に投入して、年数の経過に伴う予算の減少とともに戻す仕組みになっていくのではなく、やる気のある人が集まり、PDCA サイクルを回しながら複数プロジェクト型で進めるべき。ただし、失敗してもやり直しができる体制に。

【**ソフトの取組みを重視**】施設のようなハード面だけでなく、住民主体の取組みを支えるようなソフト面を重視したい。

【**人を大切にしたい仕組み**】各団体がバラバラにメモリアル施設を運営するのではなく、中越メモリアル回廊のように共通コンセプトを持ちつつ、一つの団体が長期的・安定的に運営しながら、震災メモリアルが携わる人が雇用面で安心して取り組んでいけるような、第一に「人」を大切にしたい仕組みが必要。

・グループ内で出た主な意見は次のとおり。

#### What 何を

【**開かれた対話の場**】「立場を超えてテーマ型セッションを継続的に実施」、「様々な人がオープンに立場を超えて、公の部分に関われる場をつくる」、「行政・市民の垣根を超え、本質的な対話ができる場」、「“その時” の話を保管だけではなく、いつでも来る人の意見を求められる施設や制度をつくる」、「いつ来ても誰かが居て話がしやすい場所づくり、自由なお茶っこサロンなど」

【**議論を実行に移す仕組み**】「議論した内容が実行される仕組み（提言又は直営の Dotank）」、「この場から法律が生まれる」

**【震災の経験を振り返られる場】**「語り部さんがいつもいる」、「オラルヒストリーの撮影場所」、「救えなかった命への反省を感じられる場所」、「私やあなたができなかったこと、今もできていないことを問い続ける場所」、「災害があっても市民の力で社会を変えることができると、勇気を得られる場」

**【命を守る覚悟を思い起こさせる場】**「未来の命を守り抜く覚悟を思い起こさせる機会づくり」、「命を守る取り組みへの社会的認知度を高める（広島なども参考に）」

**【過去を検証できる場】**「決まっている歴史を直せたり、再検討できる場」

**【東北全域を俯瞰して企画運営できる仕組み】**「中越メモリアル回廊のような東北広域の共通コンセプトで企画運営し続けるために、東北全域を繋ぐ組織や協議会を設置して自由に前向きな議論を促す仕組みをつくる」

## How どのように

**【ビジョン・対象を明確にする】**「仙台市として、この施設へのビジョンを明確にすること。広島のように社会のあり方、人としてのあり方に強いメッセージを持つこと」、「対象を明確にしないと目的がぼやけてしまう」

**【プロジェクト型で進める】**「プロジェクト型事業として進める。複数プロジェクトの並走もあり」、「行政も市民活動も失敗できるが、それを次に活かす機会にする」、「プロジェクトごとに実施し、責任主体は異なる」

**【市民協働で仕組みをつくる】**「行政だけではなく、市民が関わって動かしていく仕組みをつくる場」、「運営に対し、市民一人ひとりが支えていくような体制がないと生きた施設にならない」、「ゲートウェイを掲げている仙台市は今回のような対話の場を継続する必要がある」、「公助だけでは防災は実現しないので“住民が主役”の拠点、

**【人を大切にしたい仕組み】**「拠点は本当に必要か？ソフト面（人への支援）が大事」、「携わる人間が生きていける場」、「地域、地域活動者に還元される」

**【予算確保】**「構想だけの骨抜きにならないために、構想や基本計画に書いてあることを実行するための予算をつける」、「市民活動を取り入れ続ける予算と場所を確保する」

## ワークショップ [後半] 6班 テーブルファシリテーター 中沢 峻

### テーマ <対話・議論をし続け、変化が起きる場>

- ① テーマを実現するにはどのようなことが必要か？何をどのように行う必要があるか？  
(例：なぜ、だれ、何を、どのように)
- ② その拠点ができたら、どのように使われてほしいか？



#### ・以下のアイデア、意見を発表。

「問い又はその問いを持っている人」、「持続可能な体制・仕組み」、「シンクタンクのような情報の蓄積と発信」、「生き残った人がどう生きていくのか、復興まちづくりの振り返り」、「変化が起きる場」が必要。

#### ・グループ内で出た主な意見は次のとおり。

【**対話の問い**】「対話のきっかけ・軸のような役割」、「何のための対話・議論かが常に意識されていること」、「対話や議論の間に立つ人材」、「行政ではないファシリテーターや提案者が必須」、「ぼんやりとでもテーマを持って現場に行き行って学ぶこと」

【**持続可能な体制・仕組み**】「持続可能な体制とするために、人員の出入りを自由にし、違う視点を入れ、マンネリ化を防ぐ」

【**シンクタンクのような情報の蓄積と発信**】「人が集まり交流が生まれることで、情報が集積・発信される」、「都市総研のような公民共同のシンクタンク」、「活動をサポートする人・組織」、「フォーマルに扱われる体制、しくみ」、「震災をきっかけに公民共同組織の必要性を再認識」、「ある程度、定期的に成果を見せ続ける（でも急がない）」、「議論の結果で生まれたものがみんなに共有できる仕掛け」

【**多様性を受け入れ、誰でも参加しやすい環境**】「多様な人々の多様な関わり方が可能なこと」、「色々なセクター・年代等の方の参加」、「多様さ・複雑さ・難しさを共有する（解決ではなく）」、「声の小さい人に耳を傾けられる場」、「多様なものを受け入れる環境」、「気軽に行ける」、「居ていいと思える居場所」、「自由に話せる場が重要」

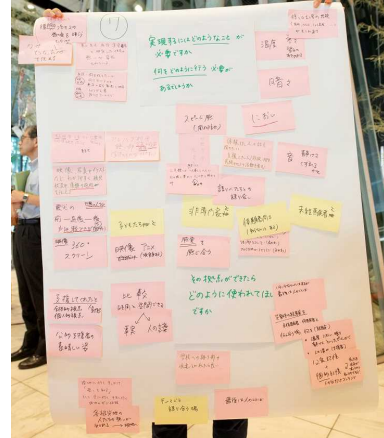
【**可変の展示**】「参加型の展示」、「何か変えたいこと、もやもやしていることを問いかける展示」

【**復興まちづくりの振り返り**】「ひとりでも多くの人々の命を救う復興まちづくりのプロセス、生き残った人の生き様を振り返る」

## ワークショップ [後半] 7班 テーブルファシリテーター 松村 翔子

### テーマ <経験を伝え合う場>

- ① テーマを実現するにはどのようなことが必要か？何をどのように行う必要があるか？  
(例：なぜ、だれ、何を、どのように)
- ② その拠点ができたら、どのように使われてほしいか？



#### ・以下のアイデア、意見を発表。

「震災を未体験の世代に伝えられる場所」、「被災者同士が体験を共有できる場所」、「体験を共有するためには、パネルや映像だけではなく、温度、匂い、暗さ、音など、体験した人しか伝えられない感覚的なものを使うこと」、「公的記憶と個的記憶を収めること」が必要。

#### ・グループ内で出た主な意見は次のとおり。

##### What 何を/Who 誰に (誰と誰が)

【復興のプロセスを語る】「復興プロセス語り、なぜそうならなかったのかを伝える」、「さまざまな立場(医者、妊婦、障害者)の論理がそこにある」、「支援した人(行政、NPO、民間等)の活動も含む」

【震災を未体験の世代に伝える】「語り部たちとの語り合い」、「公民館とか被災した一人暮らしの人が公の場に集まって自分の心の中を語れる場」、「写真、映像、文章などで個人的な震災による体験を伝える(記録)」

【被災者同士が体験を共有する】「体験した人の話も聞きたい」、「体験者同士でも知らないことがある」

##### How どのように

【五感を使って伝える仕組み】「温度、寒さ、翌日の温かさ、暗さ、におい、音(静けさ、崩れるなど)などを体験した人しか伝えられない感覚的なものを使って伝える」、「子どもたちにわかりやすい産声などで伝える」

【映像等による伝える仕組み】「映像、写真やイラスト等、わかりやすく被災状況や復興の過程を伝える」、「世界の人々に震災の前一直後一後(今)が比較できるもので伝える」、「映像360°スクリーン」、「現実味のあるアニメ」

【スピード感を持った取組み】「風化防止のためスピード感を持った取組みを」

##### 使われて欲しいシーン

【支援のことを知る】「支援してくれたこと」、「支援してくれた人の温かみ」、「公的支援者の素晴らしい姿」

【被災各地に行くきっかけ】「現地に行くきっかけとして想いを知る。そして現地で見えて聞いて疑似体験する」、「各被災地の人たちの想いが知り、そして現地へ」

【学校教育との連携】「学校に語り部を派遣できればいい」

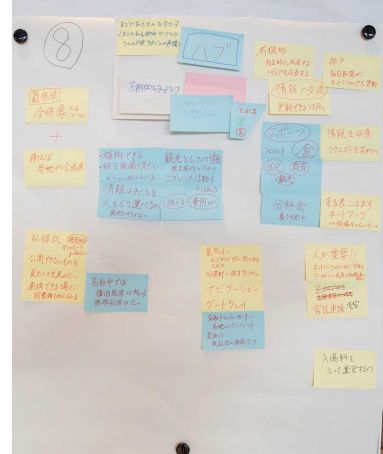
【話し合う場】「テーマごと語り合う場」

【個的記録の収集による市民参加】「個的記憶が入れば、その部分だけでも、市民は関われる」

## ワークショップ [後半] 8班 テーブルファシリテーター 豊嶋 純一

### テーマ <有機的ネットワークのハブになる場>

- ① テーマを実現するにはどのようなことが必要か？何をどのように行う必要があるか？  
(例：なぜ、だれ、何を、どのように)
- ② その拠点ができたら、どのように使われてほしいか？



・以下のアイデア、意見を発表。

#### Why なぜ

【ハブ自体が成長を】未完成からスタートしてみてもどうか。情報を交流しながら成長。

#### Who だれ

【多様な知識・ノウハウを生かす人】関係あるなしかかわらず来る人を拒まない場づくり。基本情報を把握して場を盛り上げられる“人”が重要。官官連携、民間ノウハウを活用。

#### What 何を

①沿岸部への案内をする ②未公開・現在進行形のアーカイブを集めて価値を生み出す。

#### How どのように

【持続するための収益】持続させて災害に備えるためには収益を上げることも考えるべき。

・グループ内で出た主な意見は次のとおり。

【分かりやすい情報発信】「各地の情報が把握できるインフォメーション的な役割。例えば各地の企画展を開催」、「震災の全体像や各地への交通手段の案内」、「『植樹できます』などの体験プログラムがメニューになっていて分かりやすく選べる」

【更新できるシステム】「教育旅行として各地のプログラムをコーディネートして情報発信」、「スポーツや食を入口に、関心が低い人も沿岸部に促すターミナル」、「名取トレイルセンターは各地の情報が揃っている」、「各地へ足を運び情報の収集を続け、リクエストが無いが各地へ問いかける」、「神戸では今でも毎日新聞がネットワークマップを更新」

【未公開のアーカイブをつなぐ】「研究目的で行かないとアーカイブは見ない」、「公開できないものは見たくても見てもらえない」、「記録誌からもれた資料など、処分に迫られている資料があるだろう」、「単体では価値を見出しづらいが、全体とつながれば価値が生まれる可能性が出てくる」

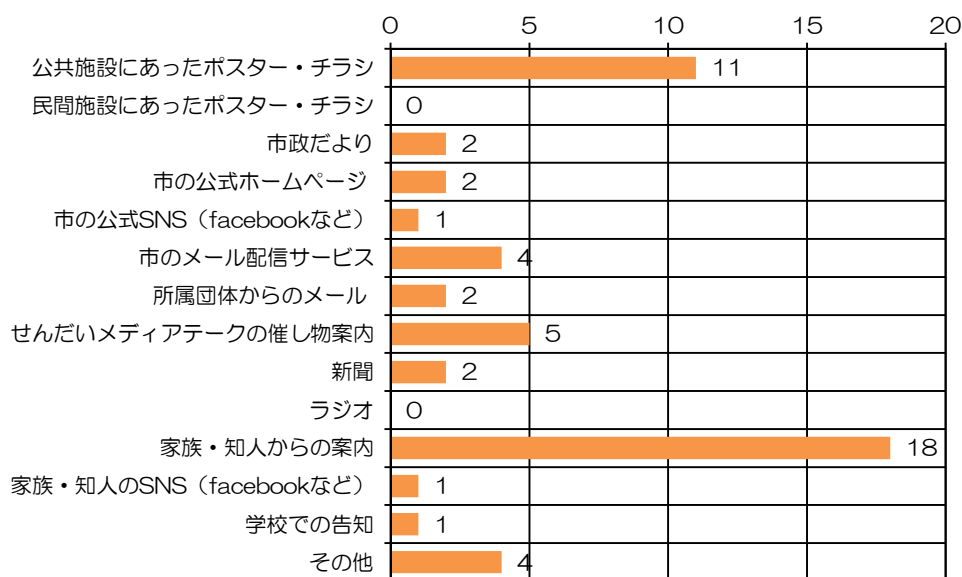
【有機的ネットワーク】「最低限ではじめて更新していく」、「すでにある拠点やプログラムを生かす」、「沿岸部と相互に補完しあい充実を図る」、「自立的に成長するハブ」

【拠点を生かす“人”】「来る者を拒まずにネットワークを作り、現場をつないでいく」、「運営には人が重要」、「アーカイブには高度な知識と長い関わりが求められる」、「民間のノウハウを活かしながら官民連携・官官連携を」

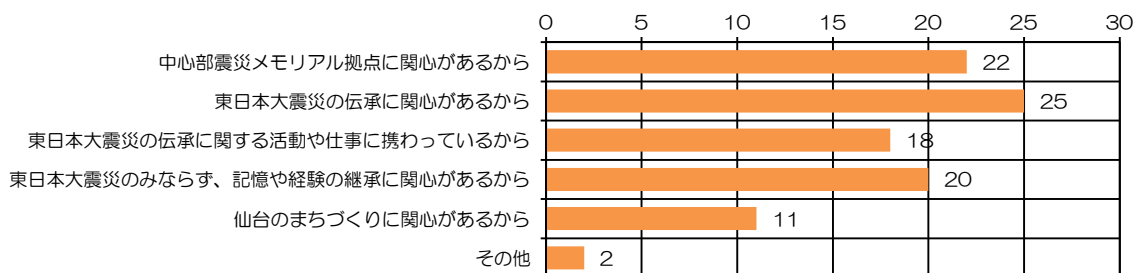
【持続するための仕組み】「情報は関心があれば手に入るので移動の足を提供すべき」、「入場料をとって運営するものであり、収益が上げられるかどうかとも考えるべき」

●アンケート集計結果（回答数 44 名）

1. 今回のイベントを何で知りましたか？（該当するもの全てを選択）

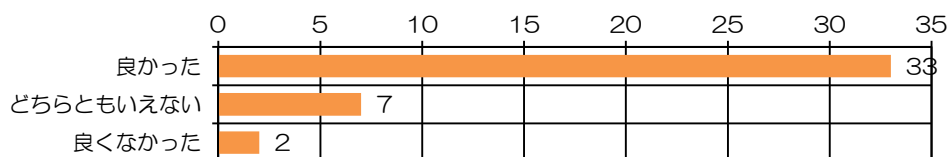


2. イベントに参加された理由をご記入ください（該当するもの全てを選択）



無記入 1

3. 講演の感想をご記入ください（いずれか1つを選択）



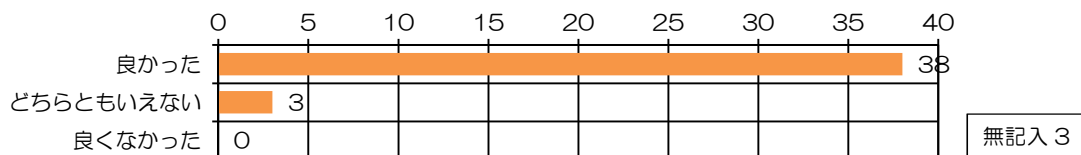
無記入 2

感想の理由（自由記述・主なものを抜粋）

良かった	<ul style="list-style-type: none"> <li>●長い歴史から見て、人は何を大切に、何のために決断するのかということを考えさせられた。仙台のメモリアル拠点は、ひとりの人を大切に。ゆっくりかもしれないけど400年後にあってよかったと思えるものを作ってほしい。</li> <li>●今回のテーマを歴史的、世界的視点で俯瞰できたから。</li> <li>●「本当のことを伝える」と「人を集めること」のバランスについて深く考えさせられたから。</li> <li>●公定と公共の違いについても学べたから</li> <li>●公的記憶と個人の記憶がうまく重なる施設の好例はどこなのか知りたかった。</li> <li>●良かったけど、時間が短くもったいなかった。</li> </ul>
どちらともいえない	<ul style="list-style-type: none"> <li>●神戸の「人防」、行政主導の拠点はネガティブなイメージになった。</li> <li>●抽象的な話で、良く理解できなかった。</li> <li>●難しかった。</li> </ul>
良くなかった	<ul style="list-style-type: none"> <li>●事柄が主で、考え方や事例が足りなかった。時間が短く、ポイントがしぼれなかったのかも。</li> </ul>



#### 4. ワークショップの感想をご記入ください（いずれか1つを選択）



#### 感想の理由（自由記述・主なものを抜粋）

良かった	<ul style="list-style-type: none"> <li>●所属がバラバラな参加者が1つのテーブルに集められていたので、様々な知見、経験を聞くことができた。</li> <li>●たまたまかもしれないが、市民というより、活動などに携わっている方々のグループだったので興味深い話ができただ。</li> <li>●若い世代の感覚が聞いて参考になった。</li> <li>●震災伝承について考える機会になった。</li> <li>●いろんなテーマで話せるのが良かった。</li> <li>●話しやすい雰囲気だった。</li> <li>●ファシリテーターの方々が良かった。</li> <li>●色んな考えを知ることができて頭の整理ができた。だが、拠点を中心部につくることありきの進め方に疑問。そもそも話にも踏み込んでほしい。</li> </ul>
どちらともいえない	<ul style="list-style-type: none"> <li>●議論する時間が少なかった。同じ議題のグループがあったので、もう少しキーワードを増やしてほしい。</li> <li>●本質的な話ではなく、当事者意識のない無責任な発言にさらされて多少辛かった。</li> </ul>

#### 5. 中心部震災メモリアル拠点の検討を進める上で、今後どのような機会が必要だと思いますか（自由記述）

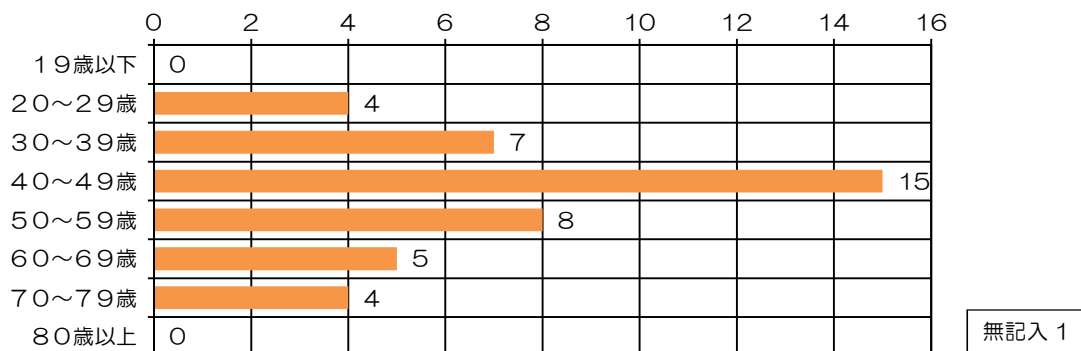
<p><b>【市民や被災者、利用者の意見を継続的に聞くこと】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●今回集まった方以外の一般市民の自由な意見を取り入れるべき。今回のようなワークショップだと少し不自由な方がちらほら見られた。</li> <li>●純粋な市民の意見を聞く機会。</li> <li>●何度も何度も機会をつくって、より多くの市民の声（意見）をきくこと。</li> <li>●活発な議論を市民や被災者に重ねていくこと。</li> <li>●被災した方々の立場から拠点のことを語ってもらう機会</li> <li>●市民・観光客（将来の利用者）の声を吸い上げる場。</li> <li>●乳幼児の子育て中の親が参加できるアンケート。ぼうけんひろばでやるとか。</li> <li>●もっと対話などが必要。</li> </ul> <p><b>【検討状況やプランを市民と共有すること】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●検討委員会は、今回の議論を活かして行くとのことだが、市民に開かれた委員会であるためには今日の議論を委員会がどう活かして行ったかを、一般市民に公表することが必要。検討委員会の討議内容を、その都度、公式サイトに公表して頂きたいと切望します。</li> <li>●このような話し合いで出た意見がどのように反映されているか分かるような情報公開をしてほしい。</li> <li>●今回のワークショップでの議論が、委員会の検討にどう反映されたのか、フィードバックのようなものがあると嬉しい。</li> <li>●具体プランをどのように広く一般市民と共有するのかという進め方が大切。</li> <li>●途中経過を伝える場（公開）。</li> </ul> <p><b>【仙台市民以外の意見を聞くこと】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●東北全体で考えるのであれば、市民だけでない意見も必要かと思う</li> <li>●仙台市以外の宮城県内の住民、東北5県の住民が仙台の拠点に何を期待するのか、聞いてみる必要があるのではないか。</li> </ul> <p><b>【各分野のエキスパートや運営のプレイヤーを巻き込んだ議論】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●有識者だけだとゴシック的な内容のやや薄いものとなりがちなので、各専門分野のエキスパートを集結したブリーフィングや意見抽出会を企画することも必要。過去の震災での現地責任者、実行部隊の指揮官などは、意外と鋭い意見をお持ちだと思う。</li> <li>●話題に挙げた機能や方向は良くても、実際に各コンテンツを提供する主体がワークするか、運営サイド（震災関係の活動をしているプレイヤー）の議論も必要。</li> <li>●必要な機能で、すでに関わっている現場組織の意見を取り組めるような機会が必要。</li> </ul> <p><b>【その他】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●〔仙台市の強い意志〕市民視点は非常に大事であると思われるが、仙台市の使命として、震災の記録、記憶、教訓を伝承しなければいけないと言う強い考えも必要ではないか。</li> <li>●〔どのような姿でも結論を出す覚悟〕結論は出ないです。皆さんの想いは様々で、すばらしく、すべて残したいけどそれもできない。どの姿になっても、満足不満足がある。誰が腹をくくるか。</li> <li>●分科会に分けての会もあっていいのかもしれない。</li> <li>●哲学と現物</li> <li>●予算をどうするか</li> </ul>
--

## 6. その他にお気づきになった点や、ご意見・ご感想等がございましたらご記入ください

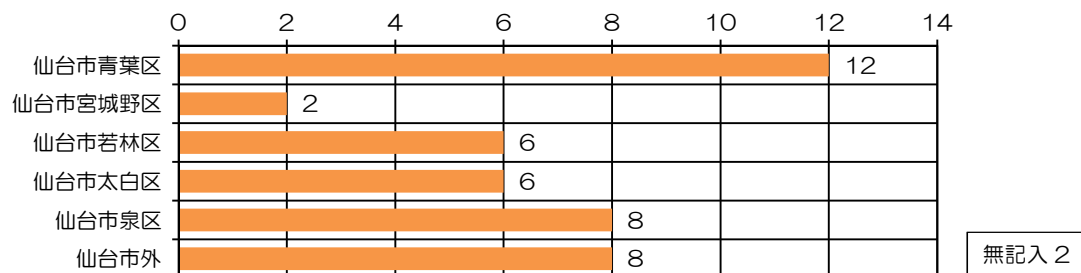
(自由記述)

- [委員会への意見の取り込み] 委員会の議論に是非取り入れてほしい。
- [市民参加プロセスの継続] 一回で終わらず、結果の公表とどのように活用されたかを報告し、続けて行って欲しい。
- [市民参加プロセスの継続] 本日のように、もっと市民や震災を経験して苦労した方々の参加を得て、議論を進めたらどうか。阪神淡路大震災の記憶として建物を建築し、公収(公定)記憶として残されたそれは市民の不在、当事者の不在が指摘されていることを教訓にすべきではないか。
- [遺族や語り部に意見を聞くこと] 遺族や語り部活動をしている人にも、もっと参加してもらいたかった。
- [高校生・大学生の意見を聞くこと] 関係者の出席が多く、一般市民の参加が少ないように感じた。検討内容や検討の状況話題を、中学生、高校生、大学の1・2年生へ集中的に公表し、彼らの参加と意見を積極的に取り入れる取組が必要だと思う。8年経過して、メモリアルの伝達対象は、小学生へ移り、高校生・大学生が伝承のための中間(本人も経験、次の世代へ伝承)となっている。高校生・大学生の意見は取り入れるべきだと思います。
- [中心部拠点の必要性が疑問] 中心部拠点の必要性について再検討すべきとの意見が出ていた。中心部の役割、意義などを考えていくうちに悩んでいたが、結局、中心部拠点は必要ないのかもしれない、と最後に思った。
- ["遊び"の要素が必要] 人間として生きる力を高める取り組みに"遊び"が重要な影響を与えらると思う。良い視点だと思う。
- [バランスの取れた原発の扱い] これまでの議事録を拝見すると、原発の議論については福島第一にしか触れられていない。仙台に電気を送っているのは女川原発であり、そこがどうだったのか正しく理解し、福島第一との違いに触れなければ、バランスを欠くと思う。
- [予算確保] 最後は何と言っても資金。国損も覚悟しての経費配分や、有力大企業の資金・人財の供出も必要となって来る。少子化で数々の問題も有るが、今できる最良の準備をしていきたい。
- [準備物の不備] ボールペンのインクが切れかかっているものがあり、メモに困っている人がいた。
- [ファシリテーターへの感想] ファシリテーターのまとめ方に疑問符が付く部分はあったが、短時間なので大変そうだなとも思った。
- [ファシリテーターへの感想] ファシリテーターのコメントが長かった。
- [感想] 参加させていただき有意義でした。ありがとうございました。
- [感想] ワークショップの意見を収束させる作業は大変かと思う。また、計画を実現させるのも、いばらの道かと思う。がんばりましょう。
- [感想] 良いアイデアがたくさん出ていたので安心した。楽しみです。

### ■年齢



### ■お住まいの市区町村



仙台市外の内訳  
石巻市、名取市、亶理町、埼玉県、兵庫県神戸市